

幼少期の英語教育

ライター：横澤樹

Good morning, good morning…♪♪ 音楽に合わせて3歳の子供たちが英語で歌っている。

日本人の子供の中に外国籍の子供が混ざり、先生もまた日本人ではないようだ。壁に貼られているサークルタイム（日本の幼稚園では「おあつまり」とよばれる）のためのカレンダー、デコレーション、教室のラグを見ても全て英語。これはセサミインターナショナルプレスクールの3歳児クラスのクラス風景である。

ここは、東京都渋谷区広尾に位置する、2000年7月4日に設立されたセサミインターナショナルプレスクール。

代表取締役社長の藤井拓治氏(63)は自身の息子をアメリカ軍国防総省の学校に12年間通わせた親であり「英語を身につけるというのは、言語だけではなく、その文化や背景を身につけることが重要だ」という。

「日本人として、ネイティブと堂々に議論ができる子どもを育てたい」そんな思いから学校の設立を決めた。現在、同校には35名の生徒が通い、内75%は日本人だという。日本の幼児教育も変わり始め、幼児期から身につける英語教育を望む親が多いようだ。

セサミインターナショナルプレスクールの授業は全て英語で行われる。朝の9時から15時まで、聞こえてくるのは全て英語だ。日本語が儘ならない幼少期に英語を学ばせることを不安に思う保護者もいる中、藤井氏は「幼児期、特に1歳から3歳の子供たちは言語に対する認識がない。つまり、英語でも日本語でも耳に入ってくるものはすべて感覚で覚えていく。そのため、子ども達は自然に英語・日本語を使い分けていける」という。家で日本語を話すことで日本語を身につけるのは足りることということだ。

また同校は通常の保育園や幼稚園と違って、文科省の管轄外となり独自の運営や教育方針になる。一見するとどこでも行われていることが一般とは一味違った意味や目的を持つのだ。例えばアートの授業で、ゾウをつくるとする。“ゾウは灰色”“ゾウの耳が大きい”といった一般常識でなくてよい。子どもたちの創造性・想像性を大事にしているので、「ピンクの耳の小さい目をもつ大きいゾウさん」でよいのだ。また興味深いのは、使う色づかいから、子どもの心を読み取ることもできるというのだ。こういったアートセラピーはアメリカで広く取り入れられているという。

日本人としてのアイデンティを大切に、海外の文化を身につけることを教育の基本にしている同校は、1月に力士たちと餅つきをし、ハロウィンには仮装をしてトリッ

ク・オア・トリート（近所を練り歩く）、サンクスギビング（感謝祭）などのイベントも多く、またこういったイベントの際には、地域コミュニティとのつながりを生かし、子供たちの社会性を育てている。

藤井氏は自らを「イレギュラー」と語るように、有名旅行会社に勤めたり芸能界関連の仕事をしたりもした。教育者としては異例の経歴である。そんな藤井氏は現在の日本の教育方法では英語を身につける時間と機会が少なすぎると語る。言語は文化をも学ぶことであるのだとも。

型にはまらない、自由な発想こそが教育を変えていくのかもしれない。

編集後記

日本の英語教育は中国や韓国と比べて、英語教育に遅れを取っていると言われている。今回取材したセサミインターナショナルプレスクールで行われている教育方法はとてもユニークであった。このようにユニークな考え方が日本の英語教育を変えていくのかもしれない。